

『涅槃經』を読んだことがない方には、ぜひ読んでいただきたいと思います。とても読みごたえがあり、たくさん疑問が湧いてくるはずです。

『一念多念文意』にはこうあります。

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。

私たち浄土真宗の門信徒は、「正しい信心と称名」によつて浄土に往生し、さとりを開く道を歩んでいます。このさとりは現世ではなく、浄土に生まれてから開かれるものです。

また、信心を伴わない称名は「自力の行」となります。

最後に、もう一度『正信偈』を引用して法話を結びたいと思います。

極重悪人唯称仏 我亦在彼摄取中

煩惱障眼雖不見 大非無倦常照我

この偈文は、私たちが人生において孤独や見捨てられたと感じるときでも、阿弥陀仏は決して私たちを見捨てず、常に慈悲の光で包んでくださっていることを思い出させてくれます。ただ念仏を称え、阿弥陀の慈悲を受けとつてまいりましょう。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

ミニスターズアシスタント デニス・マドコロ 合掌

(橋本 訳)

ボランティアの皆様へ

寺院内外に問わず、トロント本願寺の護持発展に対して、ご尽力くださるすべての方々に感謝を申し上げます。

合掌



モミジでの定例法要の様子

(8月以外毎月第2木曜日14時～)

祥月法要のお知らせ

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの仏徳を讃嘆し、報謝の思いでお勤めする法要です。

日時… 六月一日(日)

七月六日(日)

(日本語…午前十時四十五分から)

(英語…午前十一時から)

場所…トロント本願寺

※英語法要のみオンラインでの配信
オンラインでの参拝を希望される方は、その旨

を寺院事務所までお知らせください。
Zoom link を送らせていただきます。

故人が祥月でない方もご参拝下さい。

※四月より日本語の時間を変更しました。

法要後には地下のソーシャルホールにてメンバー同士の交流を楽しんでいただければと思います。



キャンプ・ルンビニ

八歳～十五歳を募集！

七月二十七日(日)～八月二日(土)

仏教キャンプに参加しませんか？

若者の絆を深める楽しい体験！

1週間のアクティビティを通して仏教のテーマを実践。

ワサガ・ビーチのお寺のコテージで行われる仏教キャンプです。十六歳以上の青少年がカウンセラーとなり、ボランティア時間を受けることができます。

八月一日(金)には八歳未満のお子様も一日体験キャンプに参加できます。

詳細はアバゲイル・カタオカまで

abagail-kataoka@hotmail.com

佛心

随喜と悪人



昔、ある法話の中で、私はサンスクリット語の「ムディタ (Mudita)」という言葉に触れたことがあります。

ムディタ、つまり「随喜（ずいき）」とは、他者の喜びを自らの喜びとする仏教の実践です。皆さんの中にも、このムディタを実践する力が備わっています。

今日は、もう一つ別の言葉を紹介したいと思います。それは「悪人（あくにん）」です。

もし『正信偈』の英訳を読んだことがない方がいれば、ぜひ読んでいただきたいと思えます。

これは浄土真宗の宗祖・親鸞聖人の中心的な著作であり、浄土真宗について必要なことがすべて書かれています。

私たちのディスカッショングループ「Let's Talk Dharmal」では、今後、この著作に何度も触れ、その意味を学んでいく予定です。その『正信偈』には以下のようにあります。

極重悪人唯称仏 我亦在彼摄取中

煩惱障眼雖不見 大非無倦常照我

「どんなに迷いや過ちをかかえた人でも、ただ南無阿弥陀仏と称えることが大切です。この私もまた、すでに阿弥陀さまのおはたらきの中

二〇二五年六月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺

導いてくださっています」（橋本 現代語訳）

これは非常に力強い教えです。たとえ私たちが阿弥陀仏の光明を見ることができなくても、常に阿弥陀仏の大いなる慈悲に包まれているのです。なんと素晴らしいことでしょう！

では、「悪人」とは誰のことでしょうか？ 私たちすべてが「悪人」なのです。親鸞聖人が語る「悪人」とは、私たち一人ひとりを指しています。

仏教でいう「三毒」とは、貪（とん・欲）、瞋（じん・怒り）、痴（ち・無知）です。

宝くじに当たりたいと願ったことがない人はいらっしゃいますか？「当たれば幸せになれる」と私たちは思います。しかし、仏教が教える幸せとは、今あるものに感謝する心から生まれるのです。

パートナーや家族、友人、あるいは車の運転中に見知らぬ人に怒りの言葉をぶつけたことがない人はいます。怒りは、自分自身を最も傷つける毒です。「敵を傷つけるために毒を飲む」ようなものです。

また、自分が不当に扱われたと感じたとき、パートナーや家族に愚かな言葉を投げたことはないでしょうか？私たちは皆、あります。

愚かな言葉で人間関係は壊れます。話す前に立ち止まり、考えることが大切です。

に抱かれています。煩惱が目さえぎって、阿弥陀さまのお光を見失っていても、阿弥陀さまの大いなる慈悲は、疲れることなく、いつも私を照らし

親鸞聖人は『顕浄土真実教行証文類』において『涅槃經』からの引用を通して、極悪の人間と仏の慈悲の関係性について明らかにしています。

彼は、父を殺して王位を奪った阿闍世王（あじやせおう）や、釈尊を殺そうとした提婆達多（だいただつた）を長文で引用し、彼らがただ人間の極悪の例ではなく、仏が浄土の教えを説くための縁を生み出した bodhisattva（菩薩）であると見ています。

この理解は、「仏の大慈悲の広大さへの気づき」と「自らの深き悪への気づき」という信心の二つの側面を表しているのです。

これは今後「Let's Talk Dharmal」で掘り下げたいテーマでもあります。

二〇一三年九月、著名な仏教学者であるマーク・ブルーム博士が、トロント本願寺で開かれた開教使会議にて『涅槃經』について講義を行いました。彼は「悪人」という言葉が誤解を生むため、「不幸な存在（unfortunate being）」という表現のほうが好ましいと述べていました。

『涅槃經』では、阿闍世が父・頻婆娑羅王を牢獄で飢え死にさせようと企てます。母・韋提希夫人（いだいけ）は、身体に食べ物や飲み物を隠して夫に届けようとしましたが、それが発覚すると阿闍世は母も殺そうと考えます。

当時、父を殺して王位を継ぐことはそれなりにあったようですが、母を殺すことは決して許されないとされていたのです。興味深いですね。

「次ページに続く」